

【授業実践報告】

人間福祉学科における初年次教育の試み ～「人間福祉基礎演習」の実施を通して～

溝渕 淳 太原 牧絵
河内 佑美 内田 沙織

0. 背景

全入時代と言われるようになって久しい。文部科学省の諸施策にも見られるように、これから各大学においては、多様な学生を受け入れるとともに、学生個人の特性に応じた教育を展開することが求められている。

多様な学生の受け入れに関してまず思い浮かぶのがAO入試である。「一芸入試」などと称されることがあるように、大学で一芸に秀でた、あるいは多様な人材を確保する手段としてこれまで広く実施されてきた。本学もその例にもれない。特に社会福祉分野においては、いわゆる「客観テスト」の成績だけではなく、将来社会福祉専門職に就くことを考えたとき、例えば「人柄」や「熱意」、「身のこなし」、「粘り強さ」などといった要素が、純粋に知識を暗記する力などよりも重視される面がある。そのため、社会福祉の分野はもともAO入試のような形で学生を募集することに向いているといえる部分があった。実際、本学に限らず、全国の多くの私立大学の社会福祉関連学部や学科では、AO入試や推薦入試による入学生が比較的多い割合を占めている。

しかしながら先述の通り、いわゆる「前半入試＝AO入試や推薦入試」で入学する学生は非常に多様であるとともに、基礎学力の幅も広い。本学が入学後新入生に実施している「基礎学力調査（アセスメントテスト）」の結果を経年的に見ても、そのことが裏付けられる。また、大学へ入学しやすくなったことで、基本的な文章の読み書きや、他者とコミュニケーションする力というものについて、若干修練が不足しているという感は否めない。このような現状を踏まえ、やはり大学において社会福祉分野の高度専門職としての学びを進めて行くことになる以上、今後の社会福祉分野における学びのための導入教育や初年次教育を展開していくことが必要ではないかと考えるようになった。

1. これまでの取り組み

とはいえ、本学科では開設以来から、学科として初年次向けの授業を開講してきた。開設当初は「人

間福祉学」（前期・必修）という学科教員全員によるオムニバス講義を開講し、学科独自のテキストも執筆、出版していた。また、「社会福祉演習」（通年・必修）も開講しており、この2教科を入学後の早い段階で展開することで、初年次教育に力を入れてきていた。しかし、2009年度からの新しい社会福祉士養成カリキュラムへの改正と、本学における教養教育科目の開講時期や内容の改正に伴い、これまでのような初年次教育の科目が展開できなくなった。

その理由としてまず、社会福祉士国家試験受験資格取得のための指定科目が増えたことが挙げられる。このことにより、これまで若干余裕のあった専門教育のカリキュラムが窮屈になった。例えば、それまでは入学年次によっては社会福祉士国家試験受験資格、精神保健福祉士国家試験受験資格、保育士資格の3つを4年間で取得することが可能であったが、このようなことが完全に不可能となった。これに加え、現代教養科目が3～4年次の選択必修科目として配置されたことがある。そのため、従来3～4年次に開講していた専門科目を1～2年次に開講せざるをえず、学科としての初年次教育の科目を配置することが難しくなった。結果として、4年間のカリキュラム全体が極めて窮屈なものとならざるをえなくなった。もちろん、教養教育科目の中に「人間科学基礎演習」という科目が新たに設けられ、学科にその授業運営が任されていた。しかしこの科目は1年次の後期に開講される授業であり、「初年次教育」というには少し時期が遅いものとなっており、入学前からの学びの流れも分断されてしまっていた。

以上のようなカリキュラム改訂の時期と前後して、本学に限らず、大学入試におけるAO入試の位置づけに再考が促されることになった。つまりAO入試の目的が本来の「多様な学生の確保」というものから、「早期における一定数の学生の確保」のための手段になってしまっている現状について、各大学が対応を迫られることになったのである。

この時期、本学では学習支援室が新たに設置された。従来、AO入試や推薦入試の合格者に対する入学前の準備教育は、入試広報課と各学科が協力して担っていた。しかし学習支援室が設置されたことによ

り、入学前の準備教育は学習支援室と各学科が手を携え、かつ、入試広報課と協力し、オープンキャンパスからAO入試、プレスチューデントデイ(AO入試および推薦入試合格者が来学し、学科教員や学生と交流を図り、入学までの学びについての理解を深めるイベント)に至るまで、一連の入学準備教育プロセスの充実を図ることとなった。本学科は、入試広報課の年ごとの方針に応じる形で、オープンキャンパス時の模擬授業の内容を充実させたり、また、AO入試をプレゼンテーション方式(テーマ学習を課し試験当日に受験者によるプレゼンテーションを実施し評価する)のもとで実施したり、プレスチューデントデイの中で、実習日誌などで用いる「記録技術」の重要性に言及したり、社会福祉の専門職に求められる視点を学ぶ入学前学習のためのワークシートを配布し、事前学習として取り組んでもらったりしていた。

これら入学前の学習は、分断を抱えながらも、先述した1年次後期の「人間科学基礎演習」に連動させる形でプログラミングされていた。しかし2014年度より教養教育科目のカリキュラムが変更となり、「人間科学基礎演習」がカリキュラムから無くなってしまったこととなった。そこで私たちとしては、今後、本学および学科の学びにおいて入学前学習から初年次教育にかけてのプロセスがより重要なものになってくるとの共通認識のもと、1年次前期に学科の専門科目として「人間福祉基礎演習」という科目を新たに設置し、学科独自に入学前教育のさらなる充実をめざした。

2. 「人間科学基礎演習」の概要

この授業では、①大学で求められる基礎的なアカデミックスキル(読む・書く・調べる・聴く・伝える…など)を修得すること、②社会福祉の専門の学びに向けたモチベーションの向上を図ること、③資格取得の方法やコース選択へのアドバイスを通して、キャリア意識の涵養を図ること、④今後共に学びを進め、深めていく仲間のつながりを構築することを目指すという目標を示した。

①については、大学入学後のリメディアル教育の充実、さらには基礎学力の上下差が激しいことが懸念されるため、少しでもこれらを平準化することを狙いとしている。②については、基礎学力をベースに、特に福祉の分野でどのような学びがあり、どのような力が身につくのかについて理解を深める。特に福祉の学びでは「演習」や「実習」の学びも多く、授業で学んだことと体験したことを統合して理解を深め、成長する…といったプロセスが重要となる。さらには、4年間という長い時間をかけるからこそ涵養することのできる、福祉専門職としての「こころ」や「倫理」等につ

いても、それらが、大学で学ぶというよりは、ふだんからの心構えや生活の中で育んでいくものである点について、初年次の段階で伝える必要があった。③については、今後どのような資格を取得するのかについて改めて理解するとともに、自分たちの理想像を確立させることを目指している。学びを深めていく上で「このような人になりたい」と思える理想像を示すことは、モチベーションの維持にもつながる。④については、社会福祉の学びと不可分であるところの「人間関係」の重要性を知るとともに、その理解を深めることが目指された。そのためにはまず、身近な仲間への理解を深めること、さらには仲間から自らの思いを伝えることへの修練が欠かせない。さらに福祉の職場はその多くが組織におけるチームプレイで支援が展開されることから、チームで何らかの成果を成し遂げることの大切さを実感してもらうことも目指された。

授業の方法は、複数教員によるオムニバス形式や少人数のゼミおよび個別指導形式など様々な形態で実施された。各回の具体的な内容は次の表1の通りである。

表1 「人間福祉基礎演習」授業内容

第1回	オリエンテーション
第2回	社会福祉の仕事と資格の理解①
第3回	社会福祉の仕事と資格の理解②
第4回	自己覚知の必要性について学ぶ
第5回	アカデミックスキル その①
第6回	アカデミックスキル その②
第7回	アカデミックスキル その③
第8回	アカデミックスキル その④
第9回	アカデミックスキル 統合的理解とふりかえり
第10回	福祉の現場にふれる①
第11回	福祉の現場にふれる②
第12回	福祉の現場にふれる③
第13回	グループ体験からの学びとつながりづくり①
第14回	グループ体験からの学びとつながりづくり②
第15回	まとめとふりかえり

以上のプログラミングは授業担当者(溝渕)を中心に、学科教員との相談のもとで行われた。また、授業運営上のコーディネーターやゲストスピーカー招聘などについて、太原・河内・内田が実務的なフォローを行う中で授業の運営がなされている。

第2～3回では、資格取得やその学びのプロセスへの理解を深めることが目指された。本学では入学直後にオリエンテーションを実施し、これらについて十分な説明を行っているつもりであるが、それでも足り

ないのではないかと懸念を共有していた。そこで、なるべく早いうちに、改めて取得資格についての詳細な説明を行うこととした。説明する教員の側としては、「自らの取得する資格について、家族等に説明ができること」を目標としていた。

第4回では、社会福祉を学び、卒業後実践する上でも欠かせない、自己覚知の姿勢の大切さ、そしてその定着、あるいはその水路づけが目指された。社会福祉は人々の生活に直接関わる職業であり、もちろん大学での学びも大切であるが、ふだんの生活を営む中においても、自ら学ぶ意志をもつことによって、全てのことがらが学びとなる可能性をもっている。そのような姿勢を持っているだけで、常に自分を成長・向上させることができ、利用者にとってよりよい生活を実現することにつながるのである。この時間では他者との関わりを通したグループワークにより、学生間の緊張を解きほぐし、かつ、他者との関わりを通して自らを知るということを経験的に理解してもらうことで、その端緒とした。

第5～9回では、少人数のゼミおよび個別指導形式による、アカデミックスキル修得が目指された。学びの基礎能力が全般的に低下傾向であること、また、そのばらつきが見られることは先に触れたとおりである。そこでこの授業では、大学生基礎力調査の基礎学力の点数をもとに、点数別に6～7名でのクラス分けを行い、クラス毎に教員が交代でつき、主に大学の授業の聴き方やノートの取り方、レポートや記録などの文章の書き方等について個別指導を行うこととした。教員はクラス毎のレベルの違いを把握しており、それぞれのクラスの状況に合わせた指導を行うとともに情報の共有・交換を行っていた。また、第9回では学生全員で学んだ内容について話しあい、教えあう機会を持った。どのような形で学んだのかを仲間に伝達しあうことによって、学びの定着が図られた。

第10～11回では、卒業生(計7名)をゲストスピーカーとして招聘し、福祉の資格や仕事だけでなく、家庭との両立など、「女性としての生き方」についても話してもらうという機会をもった。これまでも、人間福祉学会等を通し、卒業生が在学学生に対して話をするという機会を多く持ってきた。しかし今回は特に初年次の学生にこのような機会を持ってもらうことにより、キャリアパスや今後の人生に対するモデルを提示することで、将来への明確なビジョンを持ってもらい、かつ、資格取得や今後の学びに向けたモチベーションを高めていくことを狙いとした。

第12回では、福祉の学びを深める手段としてのボランティアや施設見学等の重要性について、また、「体験を通した学び」について再度レクチャーした。その上で第13～14回では、実際にグループワークを行っ

たりVTR視聴を行ったりする中で、体験を通した学びの意味や豊かさを、まさに「体験」=実感してもらう機会とした。

最後の15回ではこれまでの学びの全体を振り返るとともに、今後の学びのプロセスについて説明し、後期以降の学びへのモチベーションを高める機会とした。

3. 授業の評価と今後の展望

授業では毎回学生からのリアクションペーパーやレポートを収集した。

第2～3回の授業に対しては、履修すべき科目への理解が深まったことや、それぞれの資格を取得することで、働くことのできる職場の幅が広がることについて理解することができ良かったとの感想が多く寄せられた。また、今後の学びで不安なことについて、学生の声を集める良い機会となった。さらには、自らの取得しようとする資格について、再度立ち止まり、自らと向き合い、考える機会を提供することになったようである。

第5～9回では、教員が交代して指導に当たったこと、また、それぞれの教員が、ノートの取り方やレポートの書き方など、自らの学びのスタイルを惜しげも無く学生に伝えてくれたことが、非常に高い評価を得た。それぞれのスタイルの違いを知り、比較することを通して、学生にとって「学びには決まったスタイルが無いこと」、つまり、「自分なりのスタイルを確立することの大切さ」に気づききっかけが与えられた。このような認識に至ることは、自律的な学修者としての第一歩であると思う。

さらに小人数での個別指導形式で行ったことについても、学生の評価が高かった。個別指導の利点は「質を担保しつつも量をこなせること」である。これまでの指導の経験から考えてみると、実習を終えた学生の文章能力が飛躍的に向上しているケースが多く見られる。実習記録の形で、毎日一定のボリュームの文章を書き続けることが、学生の力になっていると感じさせられる。小人数での個別指導形式では、教員がじっくり学生と向き合い、学びに取り組むことができるため、学生の学びの向上に大きく貢献したのだと考えられる。

第9回では学生全員で学んだ内容について話しあい、教えあう機会を持ったが、この際にはKJ法を用いた。川喜田二郎が主張している通り、KJ法は非常に民主的なアイデア提示や議論を成立させることができる手法であり、特に初年次段階の学生が意見を交換する際には有効なものであると考えられる。実際に学生の感想では、この手法に対する肯定的な評価が多く見られた。また、自らの意見が表明されなかった

り、一切取り上げられなかったりするのではなく、しっかりと1つの意見として受け入れられるという体験、極端な言い方をすれば「自分自身が周囲に受け入れられる体験」が生じやすいのもこの手法の大きな利点である。

第10～11回は、アカデミックスキルと並んで、学生の評価が最も高い授業内容であった。多くの感想で、もっとこういった機会を増やして欲しいとの声が聴かれた。招聘した卒業生は、真剣なまなざしで耳を傾ける1年生達を、数年前の自分の姿に重ね、語りかけるようであった。また、それらの話を聴く学生の方も、ふだんの授業とは異なり、より身近で、親近感の持てる相手であることが安心を生み、理解の促進に寄与したと考えられる。

学生の感想をみると、本科目の当初の目的は概ね達成できたように思われる。来年度はゲストスピーカーの数を増やし、また、卒業生の声を聴く機会を増やすことが決定している。本学科が開設して15年を超え、相談援助実習や介護実習などの指導者が卒業生であることも珍しいことでは無くなってきた。社会福祉の現場において自らのスキルアップを図る際、「指導者となる」ことが1つの有効な方法である。自らが教える側にまわることで、これまでの自らの実践や業務の状況をふりかえり、確認する機会となる。今後も多くの卒業生の力を借りながら、在学生と卒業生の交流に積極的に取り組んでいきたい。

多くの授業の場で、KJ法に限らず、学生同士のグループワークを積極的に行ったことについても評価が高かった。また、「他者の考え方にふれ、多様性を認めることの大切さに気づいた」といった感想や、「自らの考え方の癖に気づかされた」という自己覚知にかかる感想なども見受けられた。大学教育全般においても、1年次の前期は非常に大切な時期であるといえる。大学での学びに戸惑うことも多い中で、若干強制的な形であるとはいえ、他者と関わる機会を多く持ち、自らに向き合う機会をもたらすことが、学生の学びに良い影響をもたらすと考えられる。プレスチューデントデイやオリエンテーションセミナーも含めた一連の流れの中で、学生同士の交流をはかる手法をこれからも積極的に初年次教育に取り入れていきたい。

本学科教員は、継続的に学生にアンケート調査を実施し、社会福祉という「ところ」や「知識」、「技術」を統合的に学ぶ分野において「理解する」とはどういうことであるのかについての研究を進めている。今後、本年度の1年生のアンケート結果を、本授業を実施しなかった年度の学生のもものと比較することで、本授業の効果などがある程度検証できるかもしれない。

あらかじめ予想できたことではあったが、小人数での個別指導形式での授業についての非常に評価が高

かったことについてももう一度強調しておきたい。これは学科において、さらには、大学全体教育展開において、小人数での初年次ゼミが学修の向上のために有効な手段であることを示しているように思う。このテーマについても来年度本授業を展開する中で検証し、カリキュラムとの兼ね合い考えながら、本学科における初年次ゼミの確立に取り組んでいきたい。

以上、今年度の状況について簡単に報告した。回数を重ねる毎に比較検討も可能となり、より詳細な検証も可能となる。今後も学科教員全体と相談し意見を交わしながら、人間福祉学科の初年次教育の充実に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 小川真史, 西山美香, 橋本圭子, 溝渕淳, 太原牧絵, 竹川加奈恵, 内田沙織, 「広島文教女子大学における福祉教育の改善に関する研究(第1報)」, 『人間福祉研究』第12号(2014), 広島文教女子大学人間福祉学, P.19-24.
- 2) 川喜田二郎, 『発想法』(1967), 中公新書。